

しょうせき れきしや き み そ おお すうせんぎゅう おお はか
匠石、櫟社の樹を見る。其の大きき数千牛を蔽い、これを繋れば
ひやくい そ たか やま のぞ じゅうじん しか のち えだ ふね つく
百囲なり。其の高き山に臨み、十仞にして而る後に枝あり。舟に為
ものすうじゅう み ものいち ごと しょうかえり ゆ でし
るべき者数十なり。観る者市の如きも、匠顧みず行く。弟子これ
と なん いわ さんぼく もつ ふね つく すなわ しず
を問う、何ぞやと。曰く、散木なり。以て舟を為れば則ち沈み、
もんこ つく えきまん はしら つく と こ ふざい きもち
門戸を為れば液櫛し、柱を為れば蠹あり。是れ不材の木なり。用
ところ ゆえ よ か ごと じゆ
うべき所なし。故に能く是くの若くこれ寿なりと。

【大体の意味内容】

だいく とりよう せき とち かみ まつ れきしや しんぼく くぬぎ たいぼく み おお
大工の棟梁の石が、ある土地の神を祀った櫟社の神木である櫟の大木を見た。その大き
さは数千頭の牛を覆い隠すほどで、幹の太さは百人で抱え込む大ききだ。その高き山を
み おお すうせんとう うし おお かく みき ふと ひやくにん かか こ おお たか やま
見下ろしていて、地上から二十メートルほどの高きところからはじめて枝が出ている。
ふね つく おお えだ すうじっぽん は で けんぶつにん おお
しかも舟を作るほどに大ぶりの枝が数十本も張り出ているのだ。見物人の多きはまるで
いちば とりよう み む い だし おどろ たず
市場のようだが、棟梁は見向きもせずに行ってしまった。弟子は驚いて尋ねた、「あれほ
ど偉大な木をなぜ無視するのですか」と。棟梁は言った、「無駄な木だ、あれで舟を作れ
ばすぐに沈み、門や戸にすれば樹脂が流れ出し、柱にすると虫がわく。何かの材料とし
すぐ ずく なん つか もの とうりよう い むだ き あれで ふね つく
て優れているところがない、何の使い物にもならない木なのだ。使われずに放っておかれ
てきたからこそ、あんな大木になるまで長生きできたにすぎない。」

この話は続きます。長くなるので後半は次回に回します。
私自身、趣味で歴史民俗学をкаじったりしている関係で、フィールドワークで全国各地を調査
するときや、個人的な外出や塾の仕事で外回りをしている時など、途中で神社仏閣があればたい

てい参拝します。不思議なことに、神社には「神木」と称する、見るからに神々しいオーラを放つ迫力満点の木が立っていることが多いです。

「夫婦〇〇」「連理の〇〇」と呼ばれる、二本の木が途中で合体するタイプのものや、マグマが噴火したような姿・模様で立っているもの、おびただしい量の筋肉が浮き上がったような木肌のもの、その中で暮らせそうなほど大きな空洞が出来上がっているもの、甘い香りや、神聖な香りを放つ木、などなど。

この荘子で語られているような、百人で抱きかかえ、山を見下ろすような巨大な木は、さすがに実在はしていませんが、圧倒的な存在感を放つ木、「トトロの森の大きなクスノキ」は、実は結構いろんなところで出会えます。神社の類を見かけたら、ちょっと中をのぞいてみましょう。もしかしたら、とても不思議な木や岩、泉などがいるかもしれません。

木とは、大地の「気」が吹きあがるさまの文様を表しているのだなあと、実感できます。そんな自然の力を具体化しているモノを、古来日本人は「カミ」と呼んでいたのかと思います。キリスト教とかイスラム教とかのような、唯一絶対神とは違って、自然の世界の威力を感じさせる

様々なモノが、日本人にとっては「カミ」でした。「八百万の神々」という言い方があるように、

カミとはいたるところに遍在へんざいしているものだったのです。「竈神かまひん」つまり台所のカミや、「廁かわや

神しん」つまりトイレのカミまでいるのですよ。つまり、私たちの素直で正直な感性で、「他とは違

う、特別な威力や迫力を感じる」所とかモノとかを、神として祀り、そのような場所を「神社」としたわけです。先に「神として敬うべき存在」があって、その権威に脅迫されて神社を作ったわけではないのです。このように、素直に「カミ」を感じる感性によって、日本人は様々なものを生み出して来ました。

感覚を磨きましょう。触覚、味覚、嗅覚、聴覚、視覚。感覚が鋭くなることで、生命の元氣は回復し、強壮になり、人生は豊かで、楽しいものになります。様々なことを楽しめるメンタルが出来上がってゆくのですね。

